
戦国の魔術師

キタキツネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦国の魔術師

【Nコード】

N0600Z

【作者名】

キタキツネ

【あらすじ】

*魔法の存在する戦国時代を舞台にした、架空戦記物です。

主人公が飛ばされた世界、そこは

魔法が存在し、女性大名が天下を賭けて争う

パラレルワールドの戦国時代だった。

その世界で最速の魔術師となった主人公は

織田家と協力関係を結び、元の世界に戻る術を探す。

第一章 第一部 黒衣の魔術師

「……ぬうつつ！ おのれ『黒衣の魔術師』め！……者どもっ！
怯むな！ 所詮、奴は魔術師。詠唱中に斬りつければよいのだ！
一斉に斬りかかるのじゃ！」

豪華な屋敷の奥深く。松明により煌々と照らされたざつと二十畳はある広い部屋のさらに奥で、厚い人垣に幾重にも守られた中年の男、ス波義銀が吼える。

「応っ！」

それに野太い声で応えた周囲の兵士たちが、白刃閃かせ僕のほうへ殺到してくる。そういやこの時代、もはや名乗りを上げての一騎打ちは廃れてたっけな。……ま、それは僕の知っている歴史のことだから、この世界に当てはまるかどうかは知らないけど。

カチリ

僕の右手がコートの中にもぐりこみ、スイッチを押す。キュルンと、耳慣れた百倍速の高速言語が紡ぎだされる。それは前へと向けた左手を伝い、白銀の波動へと形を成し目の前に迫っていた兵士を数名、轟音とともに薙ぎ倒す。

一番単純な攻撃魔法、『魔道波』だ。魔力を直接叩きこむだけの単純な魔法だが、地水風火、いわゆる四大精霊の力も、聖属性、闇属性の力も借りる必要がないため、僕にとっては詠唱時間がほとんど0に等しく、極めて使い勝手がいい。

「弓手隊。構えっ！！」

っと。こっちの兵士はおとりだったか。

目の前の徒歩武者に対応する僕から見て左手、月明かりに照らされた広い庭に、いつの間にか整列した弓手隊が指揮官の号令の下、一斉にこちらへ向けて弓を絞る。……なかなか考えられているじゃないか。ちよつと見直したよ。

「ふははははっ！ 油断したな『黒衣の魔術師』よ！ 『防御結界』が切れかけておるぞ！ その状態でこの数の弓矢を防げるかなっ！？」

義銀が高笑いを上げる。

……知ってます？ そういつの、死亡フラグって言うんですよ？
「なるほど。目の前の兵士に気を向けさせておいて、その隙を突くように庭から弓手による一斉射撃。なかなか考えられた戦術です。……けど効果のほうはどうでしょう？ 試してみてはいかがですか？」

「この期に及んで命乞いしない、その姿勢は認めてやろう。……射よっ！」

十を超える矢が空気を裂いて僕に襲い掛かる。が、『身体能力向上』の魔法を帯びている僕にとって、その全てを回避するのは容易い事。サービスで二、三発当たってやつても、大した怪我にもならないのはわかってはいるが、それでもやっぱり痛いものは痛いので素直に回避しておく。

「なっ……！？」

「……これで終わりですか？ じゃあそろそろ……」

確信していた勝ちをあつさりと覆されて絶句する義銀に向け、さつさと仕事を終わらせるべく、ゆっくりと歩き始める僕。

「射よっ！ 射よっ！ この距離で何度もかわせるものではないっ

！ 射よっ！」

義銀の絶叫に煽られるように、再び迫る弓手隊の攻撃。ああもう、めんどろだなあ。

カチリ

きゅいん…… という起動音とともに、僕を半円状に覆う防御結界が再発動される。この結界は一定時間、一定の強度で自分に向けられた物理及び、魔法攻撃を防ぐ聖属性魔法だ。時間とともに効果が薄れ、また結界を形成する魔力の強度以上の攻撃を受けると消滅するが、たかが十数本の弓矢程度で崩れるものではない。…… 本来であれば、熟練された魔法使いでも二分弱程度の詠唱時間が必要となる魔法である。僕にとっては一秒未満だけど。

僕に向けられた幾つもの矢は、それを貫くことができずに全て叩き落される。その光景に呆然とする弓手隊の指揮官を、他の兵士ごとまとめて魔道波で吹き飛ばし、再び義銀と向き合う。

「ばかな……！ 防御結界を一瞬で展開することなど出来るはずが……」

「それができるから、『黒衣の魔術師』は恐れられているのですよ。……ま、とにかくそろそろ素直に武器を捨てて……」

降伏を促す僕の声は、今度は右から聞こえた轟音によって遮られた。

漆喰の壁を力任せにぶち抜き、瓦礫の中から3メートル程度の高さの石人形がゆっくりとその姿を現す。

「お頭！ 遅くなりやした」

「待っておったぞ！ はようその小童を捻りつぶせ！ 褒美は望み

のままじゃ！」

強大な石人形の足元、その背後に隠れていた小男が僕に向けて嫌な笑いを浮かべる。……どうやらこいつが石人形を操る妖術師のようだ。

「南蛮渡来の石人形。貴様も魔術師の端くれなら、その強大な力はよく知るところであろう。対魔法使い用の兵器としてこれ以上の物はないということも、な。……やれっ！」

小男の声に石人形が反応する。僕に向かい振り上げられる固い拳。大人しく殴られる趣味はないので後方へ飛び、大きく距離をとる。石人形は僕という目標を見失い、固い木製の床にその拳を叩きつけ、轟音とともに大穴を開ける。力が強いという以前に、その重量自体が立派な武器になるわけか。

「南蛮渡来……。ゴーレムというやつですね。実際に見るのは初めてです。噂通り魔法が効かないかどうか、試してみますか」

威力を最大にした魔道波を連続で叩きつける。……うわあ、小揺るぎもしない。対人においてはそれなりの殺傷力を発揮するこの魔法も、石の塊相手では如何ともしようがない。

「効かぬ効かぬ。高速詠唱が自慢の『黒衣の魔術師』と云えど、一介の魔術師。こいつの固さ、その重量の前では手も足も出まい。……さあ、諦めてその首を差し出すがいい。武士の情けだ。一撃で終わりにしてやる」

「それはいかんぞ。儂らをここまで追い詰めてくれた、その報いは受けてもらう。一思いにやらずに、じわじわ痛みつけてやれ」

「お頭がそう仰るのであらば……。小僧、そう言うことだ。楽には逝けぬぞ？」

そう言ってまずまず嫌な感じで唇を歪める小男。

「どうせ最初からそのつもりだったのでしょうか？ 妖術師というのは性格歪んでる人が多いと聞きましたけど、本当ですね」

「き、貴様っ！ 拙者を愚弄するかつ！ 四肢をばらばらに引きちぎってやる！」

小男の言葉に反応した石人形が左右の拳を振りかぶり、交互に振り下ろす。

僕はそれを避け、右へ左へと飛びまわる。その隙を突き、妖術師本体に魔道波を放とうとするが、この小男、意外な敏捷さで常に石人形の背後に隠れるため、なかなかそのタイミングが掴めない。

「ふははははっ！ 手も足も出まい！ 逃げ回るだけか『黒衣の魔術師』よっ！」

実は手も足も出る。この石人形を潰す手段など幾らでも思いつく。水系の上級魔法で氷漬けにしてもいいし、火系上級魔法で溶岩になるまで熱し続けてもいい。ただ、どちらも後始末が面倒なので躊躇っているだけだ。氷漬けの石人形など置いていかれてはこの地に住む民にとっていい迷惑だろうし、大火事を発生しかねない火系上級魔法など論外である。

「さて。どうしましょうか……。っと、そうだ」

ぽんつと手を打つ。多分、あれが効くはず。

「どうした『黒衣の魔術師』よ。命乞いの言葉でも思いついたか？」

「いやいや。本は読んでおくものですねえ。対策を思いつきました。

……そこ、危ないですから離れたほうがいいですよ？」

「戯言を……！」

「忠告はしましたからね。いきますよ？」

僕は、今度はサポート魔法を呼び出す。『探查』の魔法を選択し発動。石人形をスキャンする。……うん。やっぱり『核』がある。……『ゴーレムには核があり、それを破壊すると行動が止まる』。昔、まだ元の世界にいた頃読んだ本にそんな話があった。知識とは偉大だ。例えばそれがライトノベルから得た知識であつたとしても、ね。

「貫けっ！」

今度は『魔道波』ではなく、『魔道砲』を選択し発動する。『魔道砲』は『魔道波』と同じ、魔力を叩きつけるだけの初期魔法の一つだが、『魔道波』が言葉の通り『波』、つまり扇状に広範囲に広がるのに対し、『魔道砲』は指向性をもって魔力を一点に凝縮する。先程のような一对多数の戦闘においては、威力こそ劣るものの範囲攻撃である『魔道波』のほうが使いやすい。が、一对一、または遠距離からの狙撃などにおいては『魔道砲』のほうが便利だ。その凝縮された魔力は、石の城壁ですらやすやすと貫通する。

——僕の手から発せられた光の矢は、ピキーンという甲高い音とともに石人形の核を正確に貫く。

核を破壊された石人形はその行動を停止し、一瞬の停滞の後、全身がばらばらとなり崩れ落ちた。

目の前に大質量の石の塊が落ちてきた衝撃で、小男の妖術師は泡を吹いて気を失っている。だから危ないって言ったのに。瓦礫で圧死しなかったただけ運のいいことである。

「……さて、と」

「ひっ、ひいいいっ！」

腰が抜けたのであろう。座り込んだままずりずりと後ずさる義銀の胸倉を掴む。

「……質問に答えてもらいましょう。織田様の領内から連れ去った女子供、どちらに監禁していますか？」

「……………」

「黙秘ですか。いいでしょう。……先程の魔法、なかなかの威力だったでしょう？ あれを人体に向けて発動すると、いい感じに穴だらけになるんですね。まっすぐ進むから人体の急所を避けれますし、かなり長い間苦しませることができるのですが……」

「……………！！ご、拷問する気かつ！」

「いえいえ。ただの例え話ですよ。ただ、僕はそれでも気は長いほうですが、それでも我慢の限界というものはありますからねえ」

そう言っただけで微笑みかけ、左手を意味ありげに掲げる。さあ、これから魔法を発動しますよ、と言わんばかりに。

「ち、地下だつ！ 地下に牢がある！ そこに……」

蒼ざめた義銀がそう言いつつ、震える手で懐から鍵を出し差し出した。

「ありがとうございます。ではお礼はこれで」
最小の威力に抑えた『魔道波』を放ち、義銀の意識を飛ばす。さて……。

「……滝川さん。いるんでしょう？ 出てきてください」

僕の問いかけに頭上から返事があり、天井裏から忍び装束の一人の男がすつと降り立つ。

「いつもながらお見事な手腕ですな」

「お世辞はいいですから。思ったより苦戦しましたし。……ここ、

お任せしたいのですが、いいですか？」

「配下の者を呼びましょう。お手前はとうされるので？」

「もちろん地下へ行きます。それが目的ですからね」

「お供いたしましょう。……おい！　ここは任せた！　とりあえず全員縛っておけ！」

男……滝川一益の声に、やはり天井裏に忍んでいた数名の男たちが次々と降りてくる。

男たちは一糸乱れぬ動きで、気を失っている男や兵士たちを効率よく縛りあげていく。

「気をつけるよ。高久殿はお心が優しいからな。命を奪われた者はほとんどいないはずだ。意識を取り戻して斬りかかってくるやも知れんぞ？」

「……素直に甘いと言ったらどうです？」

皮肉に対し言い返す僕と、それに答えて大声で笑う滝川さんは、揃って地下へ向かった。

「——織田家家中の滝川一益と高久晃である！　皆の者！　怪我はないか！」

じめじめとした暗い地下牢。固い門によって封じられたその牢内には、十歳程度の少女から三十代くらいの妙齢の人まで、十人前後の女性が捕えられていた。

疲労し、色を失っていたその顔が、滝川さんの一喝によりみるみる力を取り戻す。

領民の織田家に対する信頼と人氣が窺い知れる一幕だ。

「織田様の……！ ああ、ありがとうございます！」

「助かったのね！」

「椿ちゃん！ これでお家に帰れるわよ！」

緊張が解けたせいかわき崩れる人もいる。無理もない。女性ばかりが浚われるということは、R - 18 的ないろいろな目的があつてのことだろうし。……それなのに十歳前後の少女がいるあたり、やっぱりあのおっさんは許せない。やはりもう少し痛めつけておくべきだったと思う。……と、それはともかく。

「……危うく流すところですが、僕は織田家家中の者じゃないですからね。何度も言いましたけど」

「『織田家家中の滝川一益と織田家に協力している高久晃である』とは長すぎるのでござるよ。細かいことはどうでもいいではありませんか」

「……ま、いいですけど。とりあえず……」

僕は牢内を見回す。

『斯波義銀の屋敷には女子供ばかりが捕えられている』……そんな噂を元に、探し人——先輩がいるかもしれないここまでやってきた僕。斯波義銀討伐はそのついでだ。

——あまり期待はしていなかった。でも実際にその中に目当ての人物、先輩がいないとわかると、やはり気落ちしてしまう。

「おりませぬか……？」

今までの軽快な口調と違い、僕を気遣うようにして問い掛ける滝川さん。

「……そのようです。残念ではありますが、織田様の領民を保護できたことだけでも良かったと思います。……えっと、皆さん、お怪我はありませんか？」

気持ちを切り替え、牢内の女性たちに努めて明るい声をかける。落ち込んでもいいことはない。さっ、仕事仕事っと。

「あ、あの……」

二十代半ばくらいであろうか？ 妙に色気のある女性が手を上げる。

「はい？ どこか痛みますか？」

「いえ。私ではなく、椿ちゃんが。抵抗した私を庇って棒で打たれました……」

そう言って視線を向けた先にいたのは十代半ば、僕と同じくらいの年頃の娘さん。

「えっ！ へ、平気です！ 椿は頑丈ですから！」

「嘘おっしやい。あんなに強く殴られたのに……」

僕は門を開け牢内に入る。椿と呼ばれた女の子はしきりに遠慮していたが、やや強引にその手を取り、袖を捲り上げてみる。……かなり酷い痣ができていた。うわ。痛そう。

「椿ちゃんは乱暴されそうになった私を庇って……。本当、すまなかったね椿ちゃん」

申し訳なさそうに目を伏せるお姉さん。

「……………滝川さん」

「なにか？」

「あのおっさん。ちょっと手酷く痛めつけておいてくださいね」
「承知仕った」

こんなかわいい女の子に手を上げるような男は万死に値する。今が戦国時代とはいえ、僕の中にあるルールに変わりはないのだ。

「さて。では失礼して」

僕は聖属性魔法の一つ。『治癒』を発動する。みるみる腫れが引き、きれいな肌色が甦る。

それを信じられないといった目で見ていた女の子が、はつとしたように言う。

「そのお力……そしてそのお姿。もしかして貴方様は『黒衣の魔術師』様では……？」

「え？ あ、いやその」
「如何にも。この方こそ我が織田家の護り神、『黒衣の魔術師』ごと、高久晃殿である！」

「た、滝川さん！ 恥ずかしいからそういうのやめてください！」
「何を仰る高久殿。拙者は事実を在るがままに述べているだけで……」

「じゃあそのにやけた顔はなんですか！？ 絶対僕の反応楽しんでますよね！？」

「気のせいでごさる。高久殿は被害妄想が激しいでごさるなあ」

「……まったくもう。と、とりあえず、これで痛みは引くと思います。お大事にね」

椿と呼ばれた女の子が、尊敬の眼差しでこちらを見つめるのに耐えかねて、ややぶつきらばうに言ってしまう。……こういうの苦手なんだよ……。可愛い女の子に対する耐性向上魔法とかないかなあ。ないだろうなあ。

「……さて、上も片付いたようでごさる。拙者は馬を飛ばして城に戻りますが、高久殿、ご同行されますか？」

「いや。僕、騎乗できないし。後ろに乗るのも怖いから飛んで帰りますよ」

馬上つて案外高いんだよね。早いし。

「……拙者からすれば、鷹のように遙か上空を飛ぶことのほうが、そら恐ろしく思えるものなのですが……？」

「それは感覚の違いってものです。日が上ってから参内し、織田様にはご報告申し上げます。……では、滝川さん。また後ほど」

理解しがたい……と言った表情の滝川さんに別れを告げ、僕は地上に出る。

——月明かり。満天の空。初夏の気持ちいい風が頬を撫でる。

僕は『飛行』魔法を発動し、この世界での住処となる織田の城下町を目指して、ふわりと闇夜へ飛び立った。

第一章 第一部 黒衣の魔術師（後書き）

ご意見、感想などを頂けたらうれしいです。

第一章 第二部 織田舞奈

——翌日。清州城にて。

僕は昨晚の戦果の報告のため、織田様への取り次ぎを頼む。自分で言うのは恥ずかしいが、織田家の護り神、『黒衣の魔術師』の名前は城内の隅々にまで知れ渡っており、こういったとき、余計な詮索を受けず即座に謁見の間に通されるのはありがたい。

「——殿がお成りになりました」

側仕えの小姓がそう報告する、その声が終わるのも待たずに襖が開け放たれる。

「おう！ 晃よ。無事なようで何よりじゃ！」

豪快に言い放つその人物こそ、『この世界』における織田家の棟梁にして尾張国主。織田舞奈様、その人である。……そう。名前の通りの、うら若き女性国主なのだ。

日の光を受け輝く髪は炎のように赤く、異国の血が入っていると、いう本人の言を雄弁に示している。すらりとした長身はこの室内着よりも甲冑こそが似合うであろう。啞えたキセルが豪放な人となりを出し、信長の妹だというその姿を一層印象深くしている。

「滝川殿のご助力もあり、無事に帰参が叶いました」

そう言って頭を下げる僕。こういった言葉遣いに少しずつ慣れてきている自分に今更ながら驚く。たった数カ月とはいえ、僕もこの時代に馴染んできているかな。

「一益からも報告は受けておるぞ？ 自分は何もする必要もなく、

見ていただけでした、などと言っていたが？」

「滝川殿のご謙遜ですよ。おかげで助かりました」

「む。相変わらず固いのうお主は。我とお主の仲ではないか。もつと碎けて話せ」

「雇用主と被雇用者の関係ですから、これで問題ないかと思ひますが？」

「我はそちと会つのを楽しみにしてるというのに……。つれないのう」

そう言つてがっかりとした表情を浮かべる織田様。その手には乗らない。織田様がそういう顔をする時は、必ず僕を口説き落とそうとするときだ。もちろん性的な意味ではない。自分の家中に入れと何度も繰り返言われているのである。

「そうやって寂しがる振りをして、もう騙されませんか。……さつそくご報告したいのですがよろしいでしょうか？」

僕の言葉に先程とは別人のように表情を引き締める織田様。

「して、首尾は？」

「すでに滝川殿からご報告が上がっているとは思いますが、斯波一族の拠点は叩き潰しました。没われた織田様の領民も無事です。一族の棟梁、斯波義銀は滝川殿により捕えられました。」

「うむ。よくやってくれた。早速、義銀は追放処分しよう。……してその方の探し人は……？」

「そちらは残念ながら……」

「そうか……。すまぬのう。また兎には無駄足を踏ませてしまったようじゃ」

そう言つて軽く頭を下げる織田様。その様子を見て小姓が驚き固まってしまう。

「織田の棟梁ともあろう方が、そう簡単に頭を下げてはいけません」
「いや、我と晃は主従関係にあるわけではないからな。礼儀を尽くすのは当然じゃ」

「まあ確かにそうではありますけど……」

「やめてほしければ素直に我が禄を食め」

「それ新手の脅しですね。まったく手を変え品を変え、よく思いつきますね……」

呆れたように溜息をつく僕に、織田様は豪快に笑いかけた。

「それほどまでしてお主がほしいということじゃよ。そろそろ諦めろ」

「いやですよ。まったくもう……」

僕のいた世界のものとは少し違う、この世界の戦国時代。

魔法の存在も大きい、それと同じくらいに僕を驚かせたこと、それが所謂戦国大名たちの性別だ。信じられないことにその大半が女性なのである。

それには魔法と綿密に絡み合った理由がある。

この時代の合戦は刀や弓矢のほかに、魔法というものが基本戦力となっている。

遠距離攻撃ができ、その威力も十分である魔法は、しかし合戦時の主力とは成り得ていなかった。……あまりにも詠唱時間がかかりすぎるためである。一番簡単な攻撃魔法である『魔道波』ですら、詠唱に一分程度はかかる。戦場での一分は大きい。それゆえ、威力こそ強いとはいえ運用が難しい魔法は、合戦の主力というより、むし

る攻城戦などに使われることが多い。

……ちょうど、僕の元いた世界での火縄銃のような扱いなのだ。ちなみにこの世界には火縄銃は存在していない。異国から輸入されていないわけではなく、そもそもそういう物の存在がないらしい。多分、魔法がその代わりを務めているからなのだと思う。

……話を戻そう。——しかし、その長い詠唱時間によるリスクをも覆す大魔法が存在する。

群雄割拠する各戦国大名家が保持する、固有魔法——それは各大名家の一族だけに詠唱の言葉が伝わる、言わば秘中の秘で、各家の棟梁のみが使うことができる一撃必殺の大魔法なのだ。

例えば目の前にいるこの織田家当主、舞奈様も『閻魔火炎地獄』という、名前からして既に恐ろしい魔法を使える。同様に上杉家が使える『軍神降臨』、武田家の現当主が開発したという『風林火山』などが有名だ。

……大前提として、魔法使いには女性が圧倒的に多い。攻撃魔法の初歩となる『魔道波』程度ならともかく、それ以上の魔法ともなると、なぜか大多数の男性には習得することが出来ないためである。その理由は諸説あるが、上位魔法ともなれば精霊に語りかけ、その力を借りる必要があるため、繊細な女性の方が向いているのではないかと？ というのが有力だ。真偽のほどは不明だが、多分、それで間違いないであろう。

——つまり、この世界が女性上位というわけではなく、各大名家の誇る固有魔法を使えるのがほぼ女性だけであるため、最大の力を持つ者が一家の棟梁となる戦国の習いに従い、自然と女性大名

が増えていったのである。

「……しかし話を戻すが、晁の探し人は見つからぬのう……」

何となく、この世界の大名家のことを考えていた僕は、織田様の愁いを帯びた声によって意識が戻される。

「いつしよに飛ばされたとはいえ、確実にこの世界にいるという保証はありません。織田家の力抜きにしてはその僅かな可能性に賭ける情報すら手に入りませんし、余りお気になさらぬよう」

「私の勢力がもっと大きくなれば、更に精度の高い情報も届くのであろうかの。……まだまだ尾張一帯を手に入れただけの我が身には力が足りず、まったくもって不甲斐ないことじゃ」

そう言つてらしくない溜息をつく織田様。

「しかし織田様。斯波一族を討つたことにより、この尾張は統一を果たしたのでありましよう？ 力が足りず……などということはないかと」

「そうは言つてもな。晁よ。こんな小国、東の今川が動けばあつというまに滅ばされてしまふわ」

「今川……。現当主は今川義乃でしたっけ？」

「さよう。……三河の松平家を従え、北の武田、東の北条と同盟を組んだ今川の狙いは、上洛に間違いないと専らの噂。既に出陣の準備を終え、今日にでも駿河の国を立つという話すらある。……まったく、頭の痛いことじゃ」

「……………」

——僕は知っている。その噂が正しいということを。
そしてその結末が、僕の知っている歴史と同じになるとは限らないということも。

……あまりにも有名な『桶狭間の戦い』。

駿河の今川義元が率いる数万の大軍に、時代の風雲児織田信長が二千の兵で奇襲を掛け、その首を打ち取ったという日本史における一大事件。……これを転機とし、織田信長は天下へと覇を唱えることになるのだが、しかしその勝利は、お世辞にも戦略的とは言うことのできない偶然の積み重ねの結果だった。

華麗な勝利に目を奪われがちであるが、『たまたま』、信長が到着したその時、今川家は戦力を分散しており（とは言っても奇襲をかけた織田家の二倍以上の兵力はいたのだが）、『たまたま』急に降りだした豪雨を避け、今川の陣では臨戦態勢を解いており、『たまたま』今川本陣には戦闘経験が豊富な兵が少なかった……こういった、幾つもの幸運の積み重ねによる、言わば薄氷を踏むような勝利だったのだ。

歴史に『i f』は禁物だというが、その幾つもの幸運のうちひとつでも欠ければ、織田家の勝利はなかったとも言われる。……そもそも、十倍の兵力に対し奇襲を仕掛けるといふのであれば、そのタイミングは明け方か夜半に行くべきである。その一点においても、

信長の出陣の時間はあまりにも遅すぎるのだ。明け方に出陣した信長の軍勢が戦場に到着したのは昼過ぎだった。とても奇襲に向く時間だったとは言えない。

勿論、折からの豪雨、今川陣の油断という戦術的好機を逃さず討って出た信長の判断力は素晴らしいものだ。しかし、そこに至るまでの過程が、まさに織田信長という男の持って生まれた『天運』と、本人の感性、直感とも言うべきものだけで成されており、そこが逆説的に信長の異名を高めるのである。つまり。

『桶狭間の勝利は、織田信長でしか成し得なかった』と。

……長々と自説を唱えてみたが、要点はそこなのだ。

元いた世界での戦国の覇者、織田信長と血を分けた実の妹とは言え、信長本人ではない『織田舞奈』では桶狭間に勝利することはできないのではないか？

——だからこそ、僕は迷うし、対応に困るのだ。

目の前の織田舞奈様は、僕が違う世界、その未来から来たということを感じてくれている。それでいて、僕に自身の未来を尋ねることをしない織田様の自制心には感心するが、ともあれ僕の進言であれば素直に聞いてくれると思う。つまり、僕には僕の知っている歴史通りに織田家を勝利に導くことができるのだ。

しかし、それは正しいことなのか？

古今東西、どのような物語においても、過去に飛ばされた登場人物が歴史に関与しようとする、そこには大抵、破滅が待っている。タイムパラドックスというやつだ。歴史を変えようとする、または歴史をなぞろうとする主人公が『時間』というものに翻弄される…

…僕は過去にそんな本を幾つも読んだことがある。

つまり、僕は恐れているのだ。

自分が歴史の傍観者ではなく、当事者になってしまつてしまつてを。

だから僕は度重なる舞奈様の勧誘に応えることができない。

精々、僕自身の人探しの『ついでに』、反逆勢力に捕えられた女子供の救出や、盗賊の討伐程度しか行えない。

本来であれば、それすら歴史に対する関与なのかもしれない。でも、僕も食っていかななくてはいけないし、生活の糧を得るためには仕方のないと自分に言い聞かせつつ、織田家の依頼を受け生活費を稼ぐ日々を送っているのだ。

「……っと、話しこんでしまったな。晁に会える機会はなかなかないので、偶に会えるとなついつい時間を忘れてしまつわ」

話を切り上げるように織田様が言う。国司たるもの、やるが多いのであろう。

「呼んで頂ければいつでも参上致しますのに」

「馬鹿者。今のは遠まわしに『いつでも会えるように城内に住め』ということと言つたつもりじゃ」

「そうじゃないかと思いました。……でもまあ、藤吉郎殿のお宅もなかなか居心地がよいものですし、そもそも家中に入る気がない者を、城内に住ませるわけにもいかないでしょ」

「ほんに強情な奴だの……。まあいいわ。我は政務に戻るとする。
……この度は大義であつた。褒美は後ほど猿のところへ届けさせよう。以上じゃ」

「畏まりました。では私はこれにて」

……僕は深々と頭を下げ、謁見の間を辞した。

「晃！ 殿へのご報告は終わったのか？」

謁見の間を出て、手の行き届いた清州城の庭を歩いていると、背後から声がかかった。

「藤吉郎か。今終わったところだよ」

「晃は殿に気に入られておるからなあ。話も弾んだろ？」

僕は苦笑を浮かべつつ応える。

「相変わらずだよ。いい加減、勧誘は諦めて欲しいんだけどね」

「贅沢な野郎だ。俺なんか殿に取り入るために草履取りまでしたというのに！」

そう言つて笑いながら僕を小突く気さくなこの男。

僕の恩人にしてこの世界においては唯一の友人。そして大家でもある、木下藤吉郎。

——後の天下人、羽柴秀吉。まさにその人である。

「……で、今日はこの後どうするんだ？」

「んー。特にすることもないし、少し城下をうろついてから帰ろうかと思ってる」

「そうかそうか。つまり時間はあるということだな。うんうん」

にやりと笑う藤吉郎。……何だろう。悪い予感がある。

「……何を企んでいるんだ藤吉郎？ 素直に吐け」

「人聞きの悪いことを……。いや、実は滝川殿に頼まれごとをしていてな。ちよつと外まで付き合え」

そう言いつつ強引の僕の手を取る藤吉郎。

「お、おいっ！ 藤吉郎！ どこへ連れていく気だ！ 袖を引つ張るな！」

「いいからいいから。悪いようにはしないって」

「その発言をする人間は信じられないっ！ 離せっ！」

「まあまあ。行けば分かる」

「おいっ！」

……藤吉郎の馬鹿力に逆らえず、結局そのまま連行される僕であった。

「……で、目的地はこの茶屋か。男二人で仲良く団子でも食うのか？」

連れ去られた先は城下の端にある、小奇麗な茶屋。男二人で来て

も楽しくもない。まあ、ここの餡はなかなか上品な甘さで、結構気に入ってはいるんだけど。

「気色悪いことを言うな。滝川殿に頼まれたと言っていたらう？」

……おい！ 晃……じゃない、高久殿を連れてきたぞ！」

そう大声で店の奥に呼び掛ける藤吉郎。その声に呼ばれて出てきたのは一人の少女。

「あれ？ えっと、確か……椿さん？ だったかな？ 怪我は平気かい？」

「は、はい！ 高久様のおかげでもう痛みもありません！」

そう言いつつ慌ててぺこりと頭を下げたのは、斯波義銀のところに捕えられていた女子の一人、椿さんだった。

「そりゃよかった。……で、どういことだ藤吉郎？」

「そう睨むなよ。例の斯波義銀一派に捕えられていた女子供、これは滝川殿が村へ送り届けることになっているのだが、その前にこの椿とやらがな、命の恩人である『黒衣の魔術師』にどうしても一言、直接礼を言いたいと訴えたらしく、引き合わせてやってくれと頼まれてなあ」

「……………」

「いやいや。宮仕えの辛いところだ。上役に頼まれたとあつては断ることもできず、仕方なくこうしてお前さんを連れてきたというわけだ」

「明らかに楽しんでるよなお前」

「とんでもない。ただ、朴念仁の誰かさんに少しでも女子に慣れてもらおうと……」

「余計な御世話だ！ このっ！」

僕の振り上げた拳は、藤吉郎に軽く避けられてしまう。魔法を使

われない僕の攻撃など、戦場に生きる藤吉郎にとっては止まって見えるのである。なんか悔しい。

「まあまあ、そう怒るな。……では俺は行くからな。あとは好きにしろ」

そう言ってくるりと背を向ける藤吉郎を、慌てて引きとめる僕。

「お、おい！ どこ行くんだ？」

「どこってお前。城に戻るに決まっているだろうが。さっきも言った通り、こちらは悲しき宮仕え。日も高いうちから城を抜け出して女子と茶屋にしけこむような真似はできないだろ？」

そう正論で返されると何も言えなくなる。

言葉に詰まる僕の肩を抱くようにして、藤吉郎が小声で言う。

「……何なら今夜の晩飯は用意しないよう、ねねにも言っておくぜ？」

「なっ！ おまえっ……！ どういう意味だそれは！」

「……ま、たまには息抜きも必要ってことだ」

そう言って僕を離れた藤吉郎は、本当に城へ向かって歩きだしてしまった。

残されたのは僕と、椿と呼ばれた少女の二人。……なんか、気まずい。

椿さんもそう感じたのであろう。場を取り繕うように話し始める。

「あ、あの、先日は本当にありがとうございました！」

「あ、いえいえ。大したことはありません。気にしないで」

「きよ、今日はそれをお伝えしたくて……。すいません。お時間を取らせてしまいました……。ご迷惑でしたよね？」

「そんなことはないですよ。返って気を遣わせてしまい申し訳ないとは思うけど」

「そ、そうですね……」

うん。我ながらすごくきこちない。

藤吉郎に言われるまでもなく、僕ももう少し、女の子の扱いに慣れたほうがいいとは思うんだ。でもいかんせん、先輩が初恋だった僕にはその経験値が大幅に足りず、もじもじと居心地悪そうにしている椿さんを持て余してしまう。……いや、確かにね、先輩ほどじゃないとしてもこの子だって十分可愛いとは思うんだ。うん。ただね、だからこそ、その、対応に困るといつか……。

ぐーっ。

……その音は椿さんのほうから聞こえた。正確にはその腹部から。思わず目を向けた僕の視線の先には、真っ赤になって俯いてしまっただ椿さん。

「……椿はもう、お嫁にいきません……」

この世の終わりみたいな椿さんの声を聞き、なんか緊張が解けた。

「ぷっ。くくく……」

「わ、笑うのは酷いです！ あんまりですっ！」

涙目で訴えかける椿さんに、まあまあと手を向け、僕は店の奥に声をかける。

「すいませーん。団子を一皿とお茶を二人分。……ごめんごめん。実は僕もちよっとお腹がすいてたんだ。……よかったら付き合ってくれないかな？」

——僕のその言葉に、椿さんはやっと笑顔を浮かべてくれた。完
熟トマトみたいに真っ赤なままではあったけど、ね。

第一章 第二部 織田舞奈（後書き）

ご意見、感想などを頂けたらうれしいです。

第一章 第三部 先輩との出会いと異世界への旅立ち

「——おいしいですねえ、このお団子。本当に甘くて頬が落ちそうですよ」

そう言っただけで幸せそうに微笑む椿さん。とろけそうだな。

「そうかな？ 僕には控え目な甘さだと感じるけど。いやそれがいーんだけだね」

「高久様は甘党なのですか？ 椿には十分ですけど……」

……この時代、砂糖ってまだ貴重だったわけ？ 覚えてないや。

「はあー。お団子は美味しいし天気はいいし、椿は幸せです……」

目を細めて空を見上げる椿さん。……なんか猫っぽいなこの子。

「そりゃよかった。……そろそろ本格的な夏がくるなあ」

「ですねえ。……ところで、その、高久様？ そのお召し物、暑くないのですか？」

そう言っただけで僕の真っ黒なコートの生地を、控え目に摘む椿さん。

「ん？ ……うん。実はかなり暑い……。まあ、真夏になったら常

時、水系の魔法で涼しくするようにするつもり」

「お脱ぎになればよろしいかと思うのですが……？」

「そういうわけにもいかないんだよね。……椿さんにならいいかなほら、これ」

周囲に目を配りつつ、僕はコートの前をそつと開く。その裏側、左胸あたりに横一列にずらりと並ぶ、裏地に取り付けた五個のICレコーダーを椿さんに見せる。

「これが僕の魔法の元。僕のいた世界では『ICレコーダー』と呼ばれていた機械なんだ」

「な、なんですかこれ？ は？ 『僕のいた世界』？」
「上から順番に『魔道波、魔道砲』『防御結界』『攻撃系魔法』『回復系魔法』『サポート系魔法』……じゃ通じないか。『補佐系魔法』、その呪文が籠められている。この機械に魔法を記憶させておくことにより、僕は僕自身の力によらず、魔法を高速で……というかほとんど無詠唱で起動することが出来る。……それが『黒衣の魔術師』の力なんだ」

——僕はこの時、多分、『王様の耳はロバの耳』がしたかったのだと思う。

よき友人や理解者に恵まれたとはいえ、異世界にいる僕は常に孤独を感じている。それは、極一部の人間にしか正体を明かせない身分、多数の秘密を抱えた人間が感じる自然な感情だ。……偶に、何もかもをぶちまけてしまいたい衝動に駆られるのだ。

身近な人間にそれをすることはできない。ある意味『未来から来た』と言っても間違いではない僕の正体を知れば、よからぬことを企む輩もすり寄ってくるかもしれない。

増してや敵にそれが伝わってしまったら……。

今でこそ『黒衣の魔術師』『織田家の護り神』などと祭り上げられている僕ではあるが、その強さの元がばれてしまえば、その対応など幾らでもあるのだ。

——そんな、愚痴を零すことすら許されない生活。織田家の依頼による度重なる戦闘。元の世界に帰る目途すら立たない自分。そして、見つからない探し人。大事な僕の先輩。

そう言った諸々のことに、自分でも気がつかないうちに疲労をた

め込んでいた僕は、物言わぬ花に秘密を打ち明けるように、目を白黒させている椿さんに自然と語り始めていた。

……どこことなく、先輩と雰囲気似ている椿さんに。

「わからなくてもいい。でも、もしよかったら僕の話聞いてくれないかな？」

——僕が『先輩』、吉川 雪先輩に初めて会ったのは三月の頭。

校庭ではそろそろ梅の花がほころび始めようとする、でも、まだまだ肌寒い日が続く放課後のことだった。

当時高校一年だった僕は、何故かは覚えていないけど二年生のクラスが並ぶ廊下を歩いていて。多分、「来年からはこの階に通うんだなあ」とか考えていたんじゃないかな。

人のいる時間にそんな目立つことをするわけもなく、かなり遅い人気の無い時間だったことは覚えている。……だからこそ、微かに教室から聞こえてくる歌声に気がついたのだ。

誘われるようにそっと、歌声が聞こえる教室のドアを開けた僕の目に映ったのは、窓際に佇み、透き通るような声で囁くように歌う一人の女子生徒。長くさらさらとした黒髪と、強く抱きしめたら折れてしまいそうな、儚げな雰囲気を持ったその歌声の主は、僕は一瞬で心を奪われた。

……今だからわかる。あれは俗に言う『一目惚れ』というやつだ

った。

その女子生徒は目を伏せていたために僕の存在に気がつかず、ワ
ンフレーズを最後までしつかり歌いきり、ふーっと深呼吸をしたと
ころでようやく僕と目があつた。

——時間が止まった。

「い……」

「い？」

「いやあああああ！！！！」

儚げな雰囲気吹き飛んだ。

どうしたんだこの人！？　なんで不審者を見かけたような叫び声を
あげてるんだ！？

……　って！　こんな遅い時間に一人で教室にいる女子生徒を黙って
見つめている僕は不審者そのもの！？　よく言ってもストーリーじ
やないかつ！？

「い、いやっ！　違うんです僕は決して怪しい者じゃなくただ歌声
に惹かれて」

「やつぱり見られてたああ！！　しかも聞かれてたああ！　恥ずか
しいいい！！」

えっ？　そっち？

「もう駄目です私は！　かくなる上はここから逃亡するしか……」
そう言つて、おもむろに窓枠に足を掛けようとする女子生徒……
先輩だよな。　って！

「待つて先輩！　ここ三階！　飛び降りたら現世から逃亡しちゃうつ！」

「多分平気！　私、よく『鳥頭』って言われるし！　今なら空も飛べる気がする！」

「それ、『空を飛べそう』って意味の例えじゃないから！　そんな聞いているほうが悲しくなるような根拠を信じて飛び降りたりしないで！」

「あいつ！　きゃんっ！　ふらーいつ！」

「待つてくださいつてばー！ー！ー！！！！！」

——これが、この綺麗なオープニングとそれをあっさりとぶち壊すその後の一幕が、僕と雪先輩の出会いだった。

「……なるほど。つまり吉川先輩は演劇部で、卒業式の記念講演でミュージカルの準主役の大抜擢されたのはいいけど、歌に自信がなく一人で練習していたと」

「……はい」

囁くような声で返事をする先輩。

「で、つい夢中になつて僕の存在に気がつかないまま、ノリノリで歌いきってしまったため、その一部始終を僕に見られていたことにショックを受けてしまったと」

「………はい」

蚊の鳴くような声で返事をする先輩。

「そして見られた恥ずかしさと、無人だと思っていた教室に人がいたことに錯乱して、思わず窓から飛び降りて逃亡しようとしてしま

つたと」

「……………はい」

もはや可聴範囲下限ぎりぎりの音量で返事をする先輩。

「……………ふう……………」

「な、なんですか！ その呆れ返ったような溜息はっ！」

涙目で訴えかける先輩。……………近くで見ると意外と小柄だ。僕の肩くらいの身長。しかも童顔。眉のあたりで綺麗に一直線に切り揃えられた前髪。日本人形みたい。

そんな先輩が上目づかいで睨んでくるものだから、怖いというより、その……………。

「かわいいですね」

「な、なにを言ってるゆんですか！！」

あ。噛んだ。

駄目だこの人。第一印象とのギャップが凄すぎる。ほんと駄目だ。主に僕が。

……………あれから数分後。数十分後だったかもしれない。錯乱した先輩の飛び降りをなんとか思い留めさせ、驚かせてしまったことを謝り、ついでにお互いの自己紹介などもすませた僕たちは、あらためて先輩の奇行に関し話し合っていた。

「……………だ、だってね、高久君。演技のほうならともかく、自分の歌声ってよくわからないじゃないですか。もしかしたら私の歌って、ジャ。アン級の破壊力を持った歌なのかもしれない……………。そんなの聞かれたら、逃げ出したくもなりますよう……………」

「『ボエー』って歌うのって、案外難しそうですよね」

「あうう……………。やっぱり私の歌ってそんな感じなんだ……………」

「ああ違いますからっ！ ナチュラルに飛び降りようとするのはや

めてくださいっ！……もう！わかりました！先輩、何でもいいからちよつと話してみてください」

ふらふらと窓へと向かう先輩を引きとめながら、僕はポケットの中に常備している愛用の機械を操作する。

「えっ？何でもって言われても困りますよう……」

『えっ？何でもって言われても困りますよう……』

「ひゃあっ！なにっ！？なに今の！？」

……いい反応するなあこの人。そう思いつつポケットから機械を取り出す。

「ICレコーダーです。先輩の声を録音してみました。……綺麗な声ですよ」

「あ。うん。ありがとう……。でも、なんでこんなのもってるの？」

「趣味でして」

「えっと……趣味というと……ま、まさか盗聴……とか？」

「失礼ですね！僕、映像というか音響の仕事に興味があるんですよ！」

「あ。そ、そうなんだ。ごめんなさいでした」

まあ、いいけど。実際、ICレコーダーを持っているとこの手の誤解はよく受けるし。

「……ふーん。そっか。私の声ってこんな感じなんだ。ね、ね。もう一回聞かせてもらってもいいですか？」

「はいどうぞ。……その本体右側のボタンを押すと再生します」

「えっと……どれかな？」

「それですそれ。……違いますそれは電源です。……もしかして、機械苦手ですか？」

「……恥ずかしながら、いまだに地デジの予約録画が出来ないレベルでして……」

そう言つて悲しそうに俯いてしまふ先輩。……その言葉も表情も僕の涙を誘う。

「貸してください。……はい。いきますよ？」

もう一度、先程録音した先輩の声を再生してあげる。

きゃっきゃと子供のように手をたたいて喜ぶ先輩。……なごむなあ。

しばらくの間、言うとおりに録音と再生を繰り返していた僕に、先輩が言った。

「便利ですねえ、これ。これがあれば練習も捗りそうです。……でも、私には使いこなせないからだめかー。残念でした」

あははー……と乾いた笑い声を上げる先輩。

……気がついた時には、僕の口は勝手に言葉を紡いでいた。

「あの、先輩。もしよければ、僕に練習のお手伝いをさせて貰えませんか？」

——その提案に恐縮し、遠慮しようとする雪先輩をやや強引に説き伏せた僕は、翌日の放課後、さっそく自慢のICレコーダーたち

を持参し待ち合わせの場所である先輩の教室へ向かった。

さすがに直接、いきなり演劇部へ押しかけるのは、先輩にも他の部員にも迷惑だろうと考えたからである。

「あ。ほんとに来てくれたんだ。ありがとう高久君。よろしく願います」

ぺこりと頭を下げる先輩。長いさらさらとした黒髪が、綺麗な顔の横をはらりと流れる。

「気にしないでください。僕が好きでやってることなので」

そう言いつつ机の上に六個のICレコーダーをずらりと並べ始める。

「えっ？ あ、高久君？ こんなにいっぱい使うの？」

「ええ。複数のレコーダーがあれば、同じ歌でも高低差や音量、スピードを変えて比較することが出来るでしょう？」

ぽん、と手を打って頷く先輩。こういう仕草がいちいち可愛いくて困る。

「なるほどです。賢いですね。……あ、でも、もしかして高久君。

これ、私の為にわざわざ買い足してきてくれたとか……？」

「もともと複数持ってたんですよ。……ま、正直に言えばほんのちよつと新規で購入したものもあります。でも大したことはないのに気にしないでください」

ええ。ほんのちよつと。たったの四個ほどです。そう心の中で付け加える。……貯金の半分が吹っ飛んだが、そんなのは些細な問題だ。

「さて。時間もありませんし、さっそく始めましょうか」

……僕の言葉に、春の陽だまりのような笑顔を浮かべてくれる先輩。

この表情が見れるのであれば、ICレコーダーの一つや二つ、三つや四つくらい、本当に安いものだ、心からそう思えた。

——その日から始まった先輩と僕との時間は、楽しかった。

僕の学校の演劇部は、準主役を張る雪先輩がICレコーダーの存在を知らない（それは正直、どうなのかとも思ったが）という、お世辞にも本格的とは言えないレベルのもので、活動時間も割と短め。おかげで、そのあとから始まる僕らの自主練の時間はそこそことることができた。

最初のうちこそややぎこちなく、遠慮するようなそぶりも見せていた先輩ではあったが、

多分、本質的に人見知りはしない性格なのだろう。すぐに打ち解けてくれた先輩は終始ご機嫌な笑顔を浮かべ、気持ち良さそうに歌う。

僕はその澄んだ歌声を堪能しつつ、ICレコーダーを操作する。

録音された自分の歌声を、時に真剣な表情で聞き直し、時におどけた表情で百倍速にしたりして笑う先輩と、そのころころ変わる表情に見惚れる僕。

授業が午前中で終わる土曜日には、二人でファーストフードでお昼を食べた。

授業がない日曜日には、一日中いっしょにいた。お昼は先輩お手製のおにぎりだった。ちょっと形が崩れていたけど、とてもおい

しかった。

——そうして二人だけの時間を過ごすうちに、いつしか『吉川先輩』は『雪先輩』へ、『高久君』は『晃君』へとその呼び名を変え、僕はますます、この小柄な先輩への想いを深めていった……。そして、多分、それはきつと先輩も同じだったと、信じている。

断定できないのは、答えが聞けなかったから。

——僕たちの運命が狂ってしまったあの日。それは終業式を翌日に控えた三月半ばにしては妙に肌寒い、なんとなく不安を覚えるような曇り空の日であった。

「……………あ。あ。あー。あー。……………うん。やっぱりちよつと声が枯れてるー」

そう言いつつ、マフラーに覆われたその華奢な首のあたりを押さえる先輩。

「雪先輩がんばりすぎなんですよ。本番前に喉を潰したりしないでくださいね」

たはーと照れくさそうに微笑む先輩。

「や。でも、ほら。もう本番まで半月だしね。ここでがんばらないと、って思ったらさ」

「それはそうですけど。でも自主連で声が枯れて本番で歌えませんでしたー……では洒落になりませんよ？」

「む。それは確かにそうだけどー。……あつ、そうだ」

何かを思いついたように表情を輝かせて、僕を無邪気に見上げる先輩。

「その時は晃君に任せちゃう。もう私のセリフも歌も、全部録音してあるでしょ？　晃君が舞台袖からそれを再生して、私は口パクで……」

「いいですねそれ。たまに百倍速にしますから、がんばって口を合わせてくださいね？」

「ひゃ、百倍！？　早口言葉にも程があるよ！」

「仕方ないですね。じゃあ逆にスロー再生にすることにします」

「すつごく間延びしたミュージカルになりそうだね。むしろパントマイムだよねそれ」

「それはそれで見てみたい気もしますが……。でも却下です」

「そうだよねー。やっぱり楽しむこと考えちゃいけないよねー」

「いえ。違います。……万が一、本当にそんな事態になった時には、僕が完璧にフォローしますけど、でも、そういうことじゃなくて、その……先輩の晴れ姿、僕はすごく楽しみにしているから……」

真っ赤になって俯いてしまった僕を、きょとんとした目で見ていた先輩は、やがて僕のがうつったかのように赤面し、そつと僕のコート袖をとる。

「あ、あの、明後日から春休み……だよな？　あ、晃君は、その、は、春休み中も、私の練習に付き合ってくれるの、かな？」

先程と同じように、でも先程とは明らかに違う、何かを期待するような潤んだ目で僕を見上げる雪先輩。……ここだ！　ここしかないっ！　何度も練習したあのセリフを……！

「あ、当たり前です！　なぜなら僕は！　その！　えつと僕は！」

……なぜここで言葉に詰まる僕！　言っんだ！　一世一代の勇気を振り絞れ！

「僕は……その……せ、先輩のことが……えつと」

……だめだ。なんだこのヘタレ僕。ここで詰まっちゃだめだろう……。でも、もし、万が一、いや千が一？　もしかしたら十が一くらい？　の確率でごめんなさいされたら……。

ネガティブな考えがぐるぐる回り、その先を続けられない僕。……そんな情けない僕の思考の堂々巡りは、優しく、きゅつと僕の手を握りしめてくれた先輩の、小さく、そして暖かい手によって止まる。

「せ、先輩……？」

「晃君。その……言って？　その先。大丈夫。私、ちゃんと答えるから。きつと晃君が望む答えをちゃんと伝えるから。だから、だからお願いします。その先を聞かせてください」

そう言っつて、につこりと笑ってくれる先輩。……ああ。あれだ。

普段頼りなくて、子供っぽくて、まるで年下みたいだけど、やっぱり雪先輩は先輩なんだ。こんな僕を導いてくれる、優しい年上のお姉さんなのだ。

……大好きです。先輩。

僕は大きく深呼吸する。気持ちを落ち着かせる。そしてその言葉を……。

——そして、世界が『ずれた』

目の前にいる雪先輩が二重三重にぶれていく。先輩だけではない。そばにあった電柱も『痴漢に注意』の看板も、その姿を何重にも重ねている。

「あ、晃君！」

「先輩！　しっかり掴って！」

繋いだ手にしっかりと力を入れる。握り返してくる先輩の手。

その小さな絆を離さぬよう、また自分自身の混乱を打ち消すようにさらに力を入れる

けど。

キーンという甲高い音とともに意識が薄れていく。衝撃で意識を一瞬で奪われたわけではない。徐々に思考が暗闇に塗りつぶされていく、そんな感覚。そしてそれは僕だけのものではなく、先輩も同じだったようで。

……先にこの暗闇に呑みこまれたのは先輩だった。ふっと、その手から力が抜ける。

慌てて握り返そうとするも、僕自身ももはや限界で。目の前は真っ暗になり。

——全てが黒に塗りつぶされた。

第一章 第三部 先輩との出会いと異世界への旅立ち (後書き)

ご意見、感想などを頂けたらうれしいです。

第一章 第四部 木下藤吉郎と魔法

——瞼を開き、最初に目に入っただのは煌々とした満月だった。
気がつくと僕は、暗い森の中、その地面に大の字に倒れていた。

「あれ……？　なんだこれ？」

寝起き特有の朦朧とした意識で、寝転んだまま周囲を探る。……
地方都市ながらそれなりの規模の街に生まれ育った僕は、月明かり
のみという夜本来の暗さに戦き、深夜とて絶えることのなかった車
のエンジン音、その他の生活音が一切ない自然の静寂さによって逆
に強調される耳鳴りに怯える。

「何なんだ一体……？　僕、ついさっきまで先輩と、先輩に……先
輩っ！？」

不自然に伸ばされた僕の右腕。その手は何かを離すまいとするか
のように固く握りしめられおり、しかしなにも掴んではいなかった。
一瞬で跳ね起き、周囲を見回す。鬱蒼とした森の中のちよつとし
た広場の真ん中。そこに僕は立っていた。すぐ側には僕の学生鞆が
転がっていたが、目当ての人物はそこにはいなかった。

「せ、先輩！　どこですか！　無事ですか！？　先輩！」

ガサリ。

僕の叫びに反応するかのように、目の前の藪が音を立てて動く。

「先輩ですか！？　ここどこですか？　一体何が」

……僕の声は唐突に途切れる。目の前にいたのは雪先輩ではなかったからだ。

「……なんだよ。久しぶりの獲物だっというのに男かよ」

「まあ、そう言うな相棒。……見ればその格好。小綺麗な身なりだし、これは噂に聞く『伴天連』ってやつでねえか？　だとしたら大儲けだぞ？」

藪を掻き分け出てきた二人の男。その姿はお世辞にも上品とはい難く……というか、つるりと剃り上げられた頭頂部と、無造作に伸ばされた両サイドの髪。だらしなく着崩された着物。簡素な薄汚い甲冑もどきを付け、何より右手に下げられたその刀は……。

「お、落ち武者……？」

「うるせえ！　好きで落ちたわけじゃねえわ！」

「言ってくれるじゃねえか、兄ちゃん……！」

僕の発言に憤怒の表情を浮かべ、こちらへ歩み寄る二人。

「う、うわあああああ……！」

身の危険を感じ、咄嗟に鞆を掴み走りだす僕。

「まてこらっ！」

「逃がすかつ……！」

案の定、刀を振り上げ追いかけてくる男たち。なんだかよくわからないが、こいつらはやばい！　捕まったら何されるかわからない！　混乱の極みにある今の僕でもそれだけは理解できる。そう思い全力で走るが、いかんせん、月明かりのみの闇夜。舗装どころか、

そもそも道ですらない山肌を走り慣れない僕は、あつというまに追いつかれ背中から力任せに突き飛ばされた。成す術もなく地面に転がる僕。

「手間かけさせやがって……」

ギラギラした目でこちらを睨みつつ、その刀を振り上げる男。

あまりのことに、僕は逃げるどころか声を上げることもできない。

何だこれ？　僕の身におきているこれは一体なんだ？　現実なのか？

「さあ、素直に金目の物を差し出し……」

ひゅん！

鋭く風を切る音とともに、男の腕に矢が突き刺さる。

「ぐあつ！」

「だ、誰だ！」

その声に応えて現れた一人の男。背は高いほうではない。また身なりも絢爛豪華というわけではないが、少なくとも目の前の落ち武者たちよりは、清潔でしつかりと整った戦装備を身にまとった僕と同年代の男。

「山賊風情に名乗りを強要される云われはないが、織田家家臣、木下藤吉郎と申す。……最近、この山を根城として強盗を繰り返す輩がいるという領民の訴えを聞き、派遣された者だ。さあ、素直に縄につくか討ち死に覚悟で俺に斬りかかるか、好きなほうを選べ」

そう言つて弓を投げ捨て、男は腰の刀をすらりと抜き放つ。

「お、おい。織田家のやつだぞ」

「どうする？」

「どうするもなにも、相手は一人。こっちは二人。捕まるくらいならここは……」

落ち武者たちの方針は決まったようだ。こちらも刀を構え男に相対する。睨みあう二人と一人。——その緊張がピークに達したその瞬間。

「でえいつ！」

「甘いつ！」

野太い気合とともに打ち込んできた落ち武者Aの刀を、下からすくい上げるように弾き返す男。刃が澄んだ音を立てる。力任せの斬撃を防がれ、踏鞴を踏む落ち武者Aに今度は男のほうから斬りかかった。

その大上段からの打ち下ろしに辛うじて刃を合わせた落ち武者。そのままぎりぎりどつて鎧迫り合いが始まる。

「ぬうつー！ おいつ！ いまだ！ 斬れっ！」

落ち武者Aの指示で、先程弓矢に貫かれた落ち武者Bが、怪我をしていないほうの手に持ち替えた刃を頭上に構える。

「もらったあ！」

鎧迫り合いを強要されている男にこれを防ぐ手立てはないように見えた。だがしかし、男は不敵に笑う。

きいん！

その澄んだ音は男の背後、大木の陰から聞こえた。弓矢とは違う

白銀の光が、今まさに男に斬りかかろうとしていた落ち武者Bを貫く。音もなく崩れ落ちる落ち武者B。

「さすがはねねじゃ！ お見事！」

「まったく。藤吉郎様は無茶が過ぎます。危ないじゃありませんか」

「ねねが魔法でなんとかしてくれると信じていたからな！」

「……もう。おだてても何も出ませんからね」

大木の陰から出てきたのは着物を着た一人の女性。ふつくらとした女性らしい体のライン、優しげで母性を強く感じるその表情。まるでいたずら好きの幼子を叱るように、藤吉郎と呼ばれた男を軽く睨む。

「……さて、これで立場は逆転したわけだが」

「ひ、ひいいい！」

破れかぶれになった落ち武者Aのがむしゃらな攻撃を軽くないなし、袈裟掛けで一刀の元に斬り棄てる男。

「でええい！」

血飛沫を上げ、地面に倒れる落ち武者A。その絶命を見届けた男は、刀についた血を懷から取り出した布で拭いつつ、僕に向き直った。

「はて。奇妙な格好をしたご仁だが、怪我はないか？」

……突然放り出された見知らぬ世界。落ち武者としか表現のしようがない男たち。命の危険。現れた織田家家臣と名乗る戦装束の男。TVでしか見たことのない立ち廻り。男を貫いた白銀の光。……そ

して切り捨てられ、死んだ落ち武者。

そんな幾つもの人生初体験を僅かな時間のうちに強制させられた僕は、まるで阿呆のように口を開け、カクカクと頷くことしかできなかった。

「……うーん。未来からねえ」

死体の転がる場所から離れ、大樹の根元に火をおこし暖を取る僕たち。

何とか気を取り戻した僕が、自分の体験したことをしどろもどろに、それでもようやく話し終えると、藤吉郎と名乗った男……と、いか、木下藤吉郎と言えば、あれだよな。日本史のテストには必ずその名前が出るあの男。——羽柴秀吉。……は、信じられぬという風に首を捻る。

「僕にも信じられません。けど、事実、です」

「確かにお主のその格好。この日の本のものとは思えぬが……ううむ」

学生服の上に黒いコートを身に付けた僕をじろじろと眺める藤吉郎。

「まあまあ。藤吉郎様。そのように疑ってばかりでは話が進みませんよ?」

ねねと呼ばれた女性——僕の知ってる歴史では確か、北政所……だっけか?

「しかし、ねねよう。行き掛かり上助けたとはいえ、こいつあから

さまに怪しいし……」

「木下藤吉郎様。元からの武家ではなく織田家に仕官し、出世して家臣としてとり立てられていますね。将来は安泰です。また奥方であるねね様とはこの時代としては珍しい恋愛結婚。しっかりもののねね様は生涯あなたを愛し陰から支えてくれるでしょう。美しく優しい、まさに理想の女性とのご結婚。同じ男としてうらやましい限りです」

「おい。ねね。こいつのいうことは本当だ。全て信じるぞ俺は」

……ありがとう日本史の田中先生。あなたが授業中にくれた雑談のおかげでこの男の信頼を得ることが出来そうです。元の世界に帰れたらもう二度と授業中寝たりしません。

百八十度どころかさらに一周して五百四十度ほど意見を変える藤吉郎。そんな藤吉郎を呆れるようにして見るねね。

「さつきと言っていることが全く違うじゃありませんか……」

「ねねの魅力が分かる男に嘘つきはおらぬよ」

「……もういいです。まったくあなたときたら……」

そう言っつてツンとそっぽを向くねね。しかし満更でもなさそうに赤くなつて微笑んでいる。恋愛結婚説は本当だったんだな。なんだこのバカカップル。滅びればいいのに。

「なにはともあれ、晃さん？ 先程はすごい勢いで転んでいましたが、本当にお怪我などございませんか？」

「えっ？ あ、はい。多分どこも……痛っ！」

重ねてそう言われてようやく気がつく。目の前に迫っていた命の危険に気を取られ自覚がなかったが、どうやら手酷く腕を捻っ

たらしい。安心して気が緩んだ途端、ひどい痛みが襲ってくる。

「……すいません。どうやら捻挫したようです」

「やっぱり。さ、手を出してください。治療しますから」

そう言われおずおずと手を差し出したが、ねねは僕の腕に掌を向けたまま、何をするわけでもなく小声で何かを呟いているだけだ。

……体感で二分ほどたった頃だろうか、ねねが言葉を切ると、その掌がぼつと仄かに暖かい光を放ち始め、それが僕の腕を包み始める。

「な、なんですこれ？」

「なんですつてお前。魔法も知らないのか？　ねね自慢の治癒魔法だよ」

「ま、魔法！？　あつ！　そう言えばさっきのあの男を倒した光も……」

「あれは攻撃魔法の一種で『魔道砲』だな。……というか本当に知らないのか？」

「僕のいた世界では魔法なんてものはありませんでした……」

痛みがみるみるうちに引いていく。これが、魔法？

——戦国時代に魔法が存在したなんて僕は知らない。ってことは、僕は過去に来たと思っていただけ、実は違うのか？　違う世界なのか？

「終わりましたよ。晃さん」

そう言つてにっこりと笑うねね。

「あ、ありがとうございます、ねね様……。すごいですね魔法って」「『ねね』で構いませんよ。——そうですね。詠唱に時間がかかるのが難点ですけど、この程度ならば誰にでも使えますし、便利では

ありますね」

「だ、誰にでも？」

「はい。魔法と言うのは言の葉を積み重ね、地に満ちる魔力を吸い上げ効果を得るものです。精霊の力を借りなければならぬ上級魔法ならともかく、先程の『魔道砲』や今の『治癒』などでしたら、言の葉さえ正しく唱えられれば誰にでも使えます。……興味がおありでしたらお教えしますけど？」

「ぜ、ぜひお願いします！ あ、ちょっと待ってください」

僕は鞆からICレコーダーを取り出す。

「あら？ 晃さん、それは？」

「気にしないでください。お願いできますか？」

「はい。では攻撃魔法の基礎『魔道波』を」

「『魔道波』？ さっきのものとは違うのです？」

「先程お見せしたのは『魔道砲』。今からお見せするのは『魔道波』です。魔力の波動をぶつけるのが『魔道波』で、それを一点に凝縮するのが『魔道砲』なんです。『魔道波』のほう若干ですが言の葉が短いのでこちらのほうがよろしいかと」

「さっきみたいな狙撃ならともかく、乱戦にでもなれば攻撃範囲の広い『魔道波』のほうが使いやすいしな」

ねねの説明を藤吉郎が補足する。

「なるほどなるほど。ありがとうございます。改めてお願いします」

「はい。では……」

目を閉じ、呪文の詠唱を始めるねね。僕はそれを録音しつつ、時間を計る。

やがてまた、ちょっと距離の離れた藪に向けたねねの手に光が灯り、言葉が切れた瞬間に輝く波動となり発射され、その先の木々をなぎ倒す。……詠唱時間は一分ちようど。

これ繰り返し聞いて覚えれば、きっと僕にも魔法が……。

「すごいです……。威力は固定なのですか？」

「単純に呪文を唱える音量で上下できます。大きな声を上げれば威力も強くなりますね。……唱える言の葉を書き記したものが我が家にありますので、それを覚えれば」

「だれだっ！」

ねねの言葉は藤吉郎の鋭い叫びにかき消される。

がさりと藪を掻き分け、先程の男たちと似たような格好をした、何人もの男たちがのそりと現れた。

「さっきのやつらの仲間か……。くそ。こんなにいるとは……」

「仲間を殺ったのは貴様か。楽には死なせぬぞ？」

先頭の男がそう言い刀を構える。少し遅れて後ろに控えていた十を超える男たちもそれに倣う。どいつもこいつもギラギラとした殺気立った目をしていた。

僕たち二人を庇うようにして背に隠し、藤吉郎も刀を抜く。

「晃。おい晃」

「は、はい」

正面の男たちから目を逸らさずに、藤吉郎が背中越しに語りかけてくる。

「ねねを連れて逃げてくれ。頼む」

「藤吉郎様！」

「藤吉郎さん!!」

「藤吉郎でいい。……ひの、ふの、よの、やの、とう、つと。……

さすがにあの人数では勝ち目はねえ。俺が時間を稼ぐからその隙に」

「いやです！　ねねは藤吉郎様の側を離れません！」

そう言つてさつそく魔法の詠唱を始めようとするねね。しかし、それにちらりと視線を向け、また前を向く藤吉郎は言う。

「魔法で一人や二人を倒せても、な。次の詠唱完了までに膾斬りにされちまうぜ。……と、いうわけだ。頼むよ晃。無理矢理にでもねねを引っ張っていつてくれ」

「な、仲間はいないのか？」

僕の問いかけに、力なく首を振る藤吉郎。

「今日は偵察だけのつもりだったんでな。戦闘になるとすりゃねねを連れては来なかつたさ。……さあ、時間がない。もし、ねねに万が一の事でもあったら、こんな俺にねねを寄こしてくれた木下家に申し訳立たねえし、何より俺が死んでも死にきれねえ」

……なんてこつた。助かったと思つたのに、またピンチかよ。

「晃さん。私のことは構いませんので逃げてくださいな。ねねは、もう藤吉郎様なしでは生きていきませんので。藤吉郎様がここで果てると言つなら添い遂げとうございます」

……考える。生き残る術を考える。何か、何かないのか……。

出口のない迷路に閉じ込められたように僕の思考が無意味に回る。迫りくる死に怯える体は大量の汗をにじませ、無意識に握り締めたICレコーダーをじつとりと濡らす……。

……ICレコーダー？

「ああつー!!」

見つけた。生還の道。成功するかどうかは知らない。でも何もしないで斬り刻まれるよりは、何倍もましなはずだ！

「ねねさん！ 教えてください！ 魔法の詠唱にはリズムが必要ですか！？」

「り、りずむ！？」

「あああ通じないか！ 韻律！ そう韻律です！ 歌に載せるように唱えないと発動しないとかありませんか！？」

「えっ？ あ、いいえ。必要なのは言の葉を重ねることだけですから……速さも韻律も関係ありません」

「よし！ あともうひとつ！ 魔法の向きを決めるのは！？」

「手、です。発動したい方向に手を向ければ……。でも、それが一体……？」

「それで十分です！ 藤吉郎さん！ ……藤吉郎！」

落ち武者集団と対峙する藤吉郎の肩を掴み、目を合わせる。

「なんだ！ 早く逃げろと」

「うるさいっ！ 聞け！ ……僕も魔法を使えるかもしれない。しかも、ねねさんより早く。だから、ここは二人でいくぞ」

「はあ？ 何言ってるんだお前。さっきまで魔法の存在すら……」

「正直、出来るかどうかはわからない。でも、可能性はある。……信じろ」

睨みあう僕と藤吉郎。……やがてふつと目を逸らしにやりと笑う。

「ま、逃げても逃げ切れるわけでもないしな。……俺の自慢のねねを褒めてくれたお前さんを信じるよ。——いくぞ！」

気合を上げ目の前の男に向けて突進する藤吉郎。油断していたのであろう、刀を構えることもなく立っていた落ち武者の一人を一刀のもとに斬り棄てる。

「てめえ!!」

刀を振り下しきった藤吉郎に別の男が斬りかかる。――今だ!!

カチリ。僕は百倍速にしたICレコーダーの再生ボタンを押す。

キュルン。

その音とともに、男に向けた僕の左手が一瞬で白く光り、魔法の波動を呼び起こす。

轟音とともに発せられたその力は、そいつ一人を叩き伏せたにとどまらず、その背後に立っていた二人の男たちさえもまとめて薙ぎ倒す。

……『先程の『魔道砲』や今の『治癒』などでしたら、言の葉さえ正しく唱えられれば誰にでも使えます。』……。

――ねねさんの言葉が脳裏によみがえる。……『言の葉さえ正しく唱えれば』、その速さはないと言っていた。と、いうことは録音し早送りにした呪文でも魔法は正しく発動するってことだ!

「なっ……?」

驚愕の声は、落ち武者たちからではなく藤吉郎から発せられた。

「藤吉郎! いけるぞ!」

「お、応っ! でえいっ!」

一瞬の停滞を振り切るように、次の獲物へと刃を向ける藤吉郎。

落ち武者たちの中心にいた男が叫ぶ。

「くそっ！ 魔法使いがいたのか！ 奴から仕止める！ 次の呪文を唱えている間に斬り刻んでやるのだ！」

その声に反応した二、三人の男たちがこちらへと殺到する。僕はその殺気に逃げ出したくなる気持ちを無理矢理抑え込み、再び左手を掲げ、右手で再生ボタンを押す。

キュルン。

再びの轟音。重なり合った三人の男たちはその直撃を受け、血反吐を吐いて吹き飛ぶ。

「何だと！？ なぜだ！ なぜ呪文を唱えることなく魔法が発動するのだ！？」

唱えていますよ。呪文。ただし通常の百倍の速度で、しかも唱えているのは僕じゃなく、僕の右手の中にあるICレコーダーが、ですけどね。

心の中でそう答え、僕は三度、手に入れたばかりの魔法を発動する。

——落ち武者たちの中心、指揮を取っているその男に向かって。

「はあ、はあ、はあ……。や、やったな藤吉郎」
「ぜえぜえ……。おうよ、やってやったぜ、晃」

——全ての男たちを斬り棄て、あるいは叩き潰し、ようやく身の安全を確保した俺たち二人は、息も荒く地面に寝転びながら固くお互いの手を取り合った。

「……晃、お前は俺の、俺とねねの命の恩人だ。……俺は本気でお前の話を全部信じる。その上でひとつ提案があるのだが？」

「命の恩人はお互い様だろ？ 気にするな。で、何だ提案って？」

「お前が我が殿に目通りできるように取り図ろう。我が殿はそんなよそこのぼんぼん大名とは訳が違う。懷も器も深く大きい。きつとお前のことを受け入れ、力になってくれるであらうよ」

僕は藤吉郎のその言葉に、寝転んだまま頷く。

「よろしく頼む。……そうか。織田信長に会うのか。田中先生が聞いたら驚くだろうな」

「……信長？ 誰だそれは？」

訝しげに繰り返す藤吉郎。

「お前の主君は、織田信長じゃないのか？」

「確かに俺が仕えているのは織田家だが……。我が殿のお名前は信長などと言つものではないぞ？ それに……」

「信長とは男名であらう。我が殿のお名前は『織田舞奈』様。名前の通り女子じゃ」

第一章 第四部 木下藤吉郎と魔法（後書き）

ご意見、感想などを頂けたらうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0600z/>

戦国の魔術師

2011年12月2日21時08分発行